

# 歴史民俗資料館だより

## 行燈 (あんどん)

昔の主な光源は油とろうそくでした。その油を燃やして明るい世界を作り出したのが行燈で、行燈より明るいのはろうそくでした。そのもつとも明るいろうそくでさえ、現代の五ワットの電球よりずっと暗く、しかもゼいたく品でした。行燈は室町時代(一三九二年〜)より使われ始め、字のおり手に持って移動できる携行用燈火具として使

われていました。形・大きさ・用途はさまざまで、小皿に油を入れ、燈芯を浸して点火するもので、風を防ぎ照明効果を高めるために側面を障子紙で囲ったものです。形態は、凝ったものから単純なものまでありますが、大きく角形と丸形に分けられます。置行燈・掛行燈・吊行燈があり、置行燈は座敷で用い、枕元に置かれた有明行燈・読書

や手紙の読み書きに便利な書見行燈・看板として使われた掛行燈・街路灯として使われた辻行燈・人の多く集まる寄席や湯屋で用いられた八間行燈は、江戸時代には唯一の天井から吊るした照明具だったようです。使う油、つまり燈油(ともしあぶら)に広く使われたのは菜種油ですが、これは当時高価だったので、多くの人々はその半値ぐらいの魚油を使っており、臭いとすくに悩まされ、しかも暗いものでした。

資料館では、内側の枠が回転し、障子紙が貼つてある行燈や油皿・油つぼを展示しています。



行燈



油皿(右)・油つぼ(左)

笠松町歴史民俗資料館

〒 501-6052 笠松町下本町 87

☎ 388-0161 FAX 388-0185

## 長良川流域市町村の『川文化ネット◇ながろ』交流コーナー

9



### 板取村 川浦溪谷 (かおれけいこく)

高さ30m、全長7kmに及ぶ断崖の溪谷。その荘厳さとは対照的に、春には岩ツツジが咲き乱れ、夏には緑、秋には紅葉、そして冬には美しい雪景色と見事な景観をつくりだします。神秘的で静かな秘境です。

#### [アクセス]

- 東海北陸自動車道「美濃」IC下車、洞戸村経由で50分
- 国道256号で山縣市、洞戸村経由で70分

[問合せ] 地域計画課 (☎0581・57・2111 内線59)

